

—ものがたりに登場する石たち— ^{ひうちいし} かちかち山の火打石

石というのは、時にものがたりの中で ^{じゅうよう}重要なアイテムとして登場することがあります。今回は昔話「かちかち山」に出てくる石を ^{しょうかい}ご紹介しましょう。

「かちかち山」は、うさぎがいじわるなタヌキに ^{しかえ}仕返しするお話です。ものがたりに ^{とうじょう}登場する仕返しの中で一番 ^{ゆうめい}有名なものは、たぬきが背負っているたきぎにうさぎが火をつけて、やけどをさせるというものです。この時に火をつけるのが、ものがたりのタイトルにもなっている、たたくと「かちかち」と音のする「火打石」です。



火打石で火をおこすというと、石同士をぶつけて行なうと思われがちですが、石だけではいくら ^{がんば}頑張っても火をつけることはできません。火をつけるには、「火打石」の他に「火打金」^{はがね}という鋼（鉄が主成分の ^{ごうきん}合金）が必要です。火打石と火打金を打ち付けることで、火打金の一部がけずられて火花となり、これによって火をつけることができるのです。ここで重要なのが、火打石は ^{きんぞく}金属をけずり取るほどに硬く ^{かた}なければならない、ということです。物と物をぶつけた時には、かたいほうがやわらかいほうを削ります。石と金属はどちらもかたい ^{いんしょう}印象がありますが、火打金より火打石のほうがかたいのです。ということは、火打金よりかたい石は、火打石として使えるということになります。実際に火打石として使われていた石には、「フリント」「玉髓」^{ぎょくずい}「チャート」「石英」などいくつかの ^{しゅるい}種類があります。そしてこのようにしてできた火花を燃えやすいものにとぼして ^{ひだね}火種を大きくすることで、火をつけることができるのです。火打石を使用すると、木と木をこすり合わせる ^{まさつしき}摩擦式に比べ ^{かんたん}簡単に火をつけることができるので、^{かまくら}鎌倉時代から ^{えど}江戸時代にかけて火打石がよく使用されていました。この火打石による ^{げんり}発火原理は、現在もライターとして使われています。世の中には便利なものがどどんうまれていきますが、単純な原理で使いやすいものはいつになってもすたれることがありません。そういうものも大切にしていきたいですね。

(2012 年 12 月 増渕佳子)



火打石と火打金

当館ミュージアムショップで取り扱っています。

※最初に実用化されたライターは 1772 年に平賀源内が発明した「刻みたばこ用点火器」で、火打石にバネ仕掛けの小さなハンマーを打ち付けて点火するものでした。